

雪洞作りの実際(実用編)

1. 雪洞はなぜ必要なのか？

晴れた雪山の眺望は素晴らしくラッセルの苦労も吹っ飛ぶが、一旦天気が悪化すると周囲の状況は一変する。強い風は体感温度を急激に下げ、低体温症を発症しやすくなりホワイトアウトになると進む方向が定まらない。無理して動かず体力を温存することが冬山行動の鉄則である。雪洞はこのような時の緊急避難の手段として用いられる。「かまくら」でも体感できるように風雪をシャットアウトすると意外に寒さは和らぐものである。

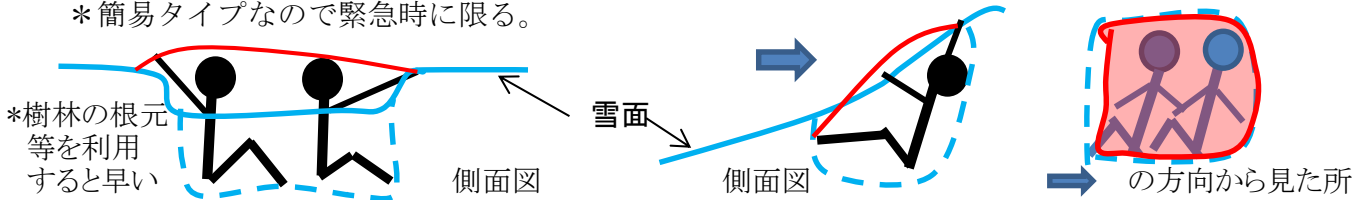
2. 雪洞の種類と特質

雪洞はその目的によって形が違ってくる。生死を分ける緊急時には一刻も早く風雪から身を守る必要があり、一方、多少時間の余裕があり、訓練等で雪洞生活を楽しみたい場合もある。その概要を記す。

A、緊急時の雪洞

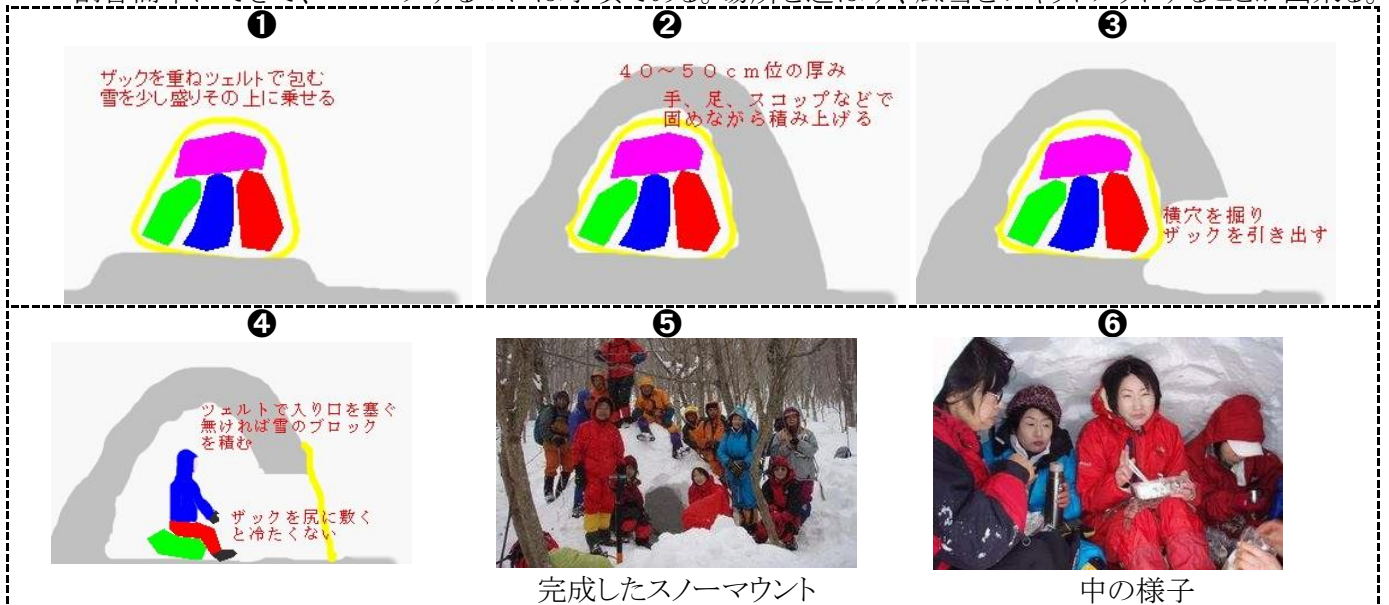
緊急時ですから一刻を争います。出来るだけ手間をかけず、風雪を避けなければなりません。

- ①窪地を利用して堅穴を掘る。
 - ・下図の点線のように雪面を座高位迄掘り下げツェルトやレジャーシートで上面を覆う。
 - *簡易タイプなので緊急時に限る。
- ②斜面を利用して簡易横穴を掘る。
 - ・下図のように斜面を掘り、ツェルトなどで覆う。
 - ・穴は必ず風下側にする。



③スノーマウンドを作る。(新規実験)

割合簡単にできて、ビバークするには手頃である。場所を選ばず、風雪をシャットアウトすることが出来る。



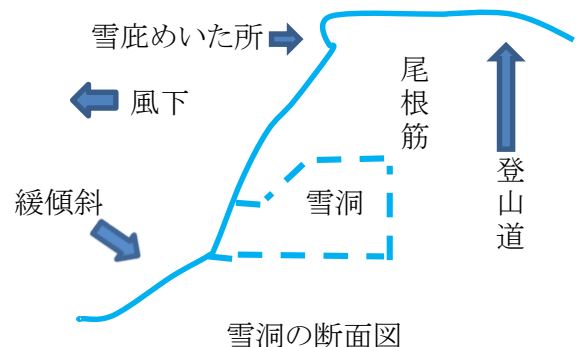
B、テント代わりの雪洞

雪洞のみを頼りにする雪山は危険が伴う。テントは持参しよう。以下居住性の良い雪洞を考えてみよう。

①雪洞を掘る場所

雪洞を掘る場合、場所の選定が最も重要なポイントである。次の点に注意して探そう。

- ・入口に当たる部分が風下かどうかチェックする。
- ・雪庇めいた場所を探す(崩落の無い事)。
- ・上からの雪崩のデブリや下の急傾斜地は避ける。
- ・周囲にブッシュが無いことを確認する事。
- ・除雪の投棄に楽かチェックする。
- ・上部に登山道が無い事を確認する。



②雪洞を掘る道具

- ・スコップ: 少し大きめのスコップが使い易い。又柄は短い方が楽。
- ・スノーソー: 雪を掘り出す時、予めスノーソーで切り込みを入れておくと楽。
- ・レジャーシート: 掘り出した雪を外に運び出す時に楽。入口の封鎖に。ツェルトでも良い。
- ・小型の鋸: ブッシュがあったら切るのに便利。

3. 雪洞作りの実際

①まず、矢印の部分の除雪を行う。高さは1.5m程は必要である。



②奥の除雪を進める。スコップでブロック状にして除雪。穴の高さは最初60cm程とする。



③更に奥と天井の除雪を行う。床は入口より高めにする。排雪楽天井は1.5m程



④雪だし
雪出しはレジャーシートに載せると運び出しやすい。



⑤作業は共同で
作業は交代しながら共同で進める。正面の屋根厚は1m位欲しい



⑥ほぼ完成です
内部は奥行×幅は約2m角



⑦入口の設置
ツェルトかレジャーシートで遮蔽す



⑧要注意
ブッシュは鋸で切る。



◎雪洞内の整理整頓も大切です。
雪洞内の壁に棚をつける。



●雪洞を作る場合の注意点

- ・雪洞は大きさや、人数や場所の条件によりますが、約2時間近くかかるので時間配分を慎重に行う。
- ・天井の崩落は無いが、常に注意して作業をする事。天井を薄くしすぎない事。
- ・手は濡れやすいので、防水手袋(ゴム製)があると便利。
- ・雪洞の大きさは概略2m四方以下にした方が無難です。足の部分を切り込むと広く使える。
- ・天井からの滴を最小限にするため、天井はアーチ形にし、出来るだけ滑らかにする。

4. 雪洞での生活

- ①酸欠にならないよう十分注意する事。次の様な症状が出てきたら要注意。(ローソクでチェック)
 - ・火が消える、火がつかない。
 - ・気分が何となく悪い人が複数人出た。
 - ・目が痛い、頭が痛い、息苦しい等。
- ②煮炊きする時は出来るだけ蓋をして蒸気を発散させない事。⇒水滴を最小限に。
- ③シュラフは濡らさないように必ずゴアテックスのシュラフカバーで覆う。
- ④万一の事を考え、ザック等背の高い物を枕もとに置く。



5. 後始末

- ①登山道の近くに雪洞を掘った場合は朽ちた場合危険なので穴をあけるか、埋め戻しておく。

